Cat in the Rain and Ambiguous Fallacy

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗原, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3389

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

“Cat in the Rain”――なにが曖昧か

栗　原　　裕

テクストに私たちを悩ます多くの細部があれば，
それらが一体どこから出て来たのかを問う。
――フランク・カーモード『秘義の発生』
蟹は甲羅に似せて穴を掘る。　――日本の格言

David Lodge の論文 “Analysis and Interpretation of the Realist Text : Ernest Hemingway’s ‘Cat in the Rain’” (Lodge，1981) は年来の物語の理論的研究の成果をもって現実の物語の実践的批評に向かったとき，理論が実践にどのような寄与をするかを検討してみせた論文であった。Lodge 自身が断っているように，それは Christine Brook-Rose が *The Turn of the Screw* について行なった作業 (Brook-Rose，1976，1977，1981) を Hemingway の “Cat in the Rain” についていわば縮尺して試みたものである。そして，その成果は，Hemingway のこの短篇が古典的なブルジョワ・リアリズムと地続きでありながら，曖昧かつ多値で，解釈の閉鎖に抵抗する作品であることが判明したというのであった。

この作業の手順と成果は Hemingway 研究の分野に新鮮な衝撃を与えたようで，たとえば Paul Smith はこの論文が Hemingway 批評においてもっとも挑戦的なものであることを認め，この論文が唯一群を抜いた状態が続いているという事実が近年の Hemingway 批評の状況を語るものとなっている，とも述べていた (Smith，1983：48)。

理論的な装備が有効であったこと，分析の対象となった作品の深みが増したこと，この方法と対象の双方にとってめでたい結果が得られたことで，この論文の教育的意義は大きかった。けれども，Lodge の議論には強い先入主と無自覚の作意性があり，それによって事実を歪めるところが生じている。このことを明らかにするのが本稿の主たる目的である。

Lodge は “Cat in the Rain” に解釈が決定的に分かれるところ（すなわち曖昧）があることを指摘する。1 つは標題にある猫の同一性に関するもので，もう 1 つは主人公のアメリカ人女性の妊娠に関するものである。アメリカ人女性がホテルの窓から雨のなかに見た猫とあとでメイドが届けてくれた猫とが同じ猫であるとする読みと，違う猫であるとする読みとがあるという。一方，アメリカ人女性が強度の妊娠願望の結果として無意識に妊娠の錯覚をしたとする読みと，現実に妊娠していることから妊娠の徴候を呈しているにほかならないとする読みとがあるというのである。

1　結末は本当に曖昧か

普通に物語に接する普通の読者にとって，物語中のアメリカ人女性が雨のなかに見た猫と最後にメイドが届けてくれた猫とは別の猫であるとしか読めない。別の猫であると語り手がわざわざ断っ

ているわけではないが，同じ猫であるとは思えない。けれども，Lodge によれば，Carlos Baker（1952）が同じ猫だと読んでいるというのである。

Carlos Baker の原文を引く。

> "Cat in the Rain," another story taken in part from the woman's point of view, presents a corner of the female world in which the male is only tangentially involved. It was written at Rapallo in May, 1923. From the window of a hotel room where her husband is reading and she is fidgeting, a young wife sees a cat outside in the rain. When she goes to get it, the animal (which somehow stands in her mind for comfortable bourgeois domesticity) has disappeared. This fact is very close to tragic because of the cat's association in her mind with many other things she longs for: long hair that she can do in a knot at the back of her neck; a candle-lighted dining-table where her own silver gleams; the season of spring and nice weather; and, of course, some new clothes. But when she puts these wishes into words, her husband mildly advises her to shut up and find something to read. "Anyway," says the young wife, "I want a cat. I want a cat. I want a cat now. If I can't have long hair or any fun, I can have a cat." The poor girl is the referee in a face-off between the actual and the possible. The actual is made of rain, boredom, a preoccupied husband, and irrational yearnings. The possible is made of silver, spring, fun, a new coiffure, and new dresses. Between actual and possible stands the cat. It is finally sent up to her by the kindly old inn-keeper, whose sympathetic deference is greater than that of the young husband. (Baker, 1952：135-136)

Baker のこの文章は，芸術家としての Hemingway の全体像を描き出そうとする大きな著作の第 6 章 "The First Forty-Five Stories" と題する章のなかの，"many marriages" と題する節に含まれている。これが "Cat in the Rain" について触れたすべてである。

Lodge は Carlos Baker のこの文章を引いた上で，つぎのように述べている。

> There are several things to quibble with in this account of the story. Most important perhaps is Baker's assumption that the cat sent up by the hotel keeper at the end is the same as the one that the wife saw from her window. This assumption is consistent with Baker's sympathy with the wife as a character, implied by his reference to her as 'the poor girl' and his description of the disappearance of the cat as 'very close to tragic'. The appearance of the maid with a cat is the main reversal, in Aristotelian terms, in the narrative. If it is indeed the cat she went to look for, then the reversal is a happy one for her, and confirms her sense that the hotel keeper appreciated her as a woman more than her husband . . .
>
> The description of the tortoise-shell cat as 'big', however, suggests that it is not the one to which the wife referred by the diminutive term 'kitty' and which she envisaged stroking on her lap. We might infer that the padrone, trying to humour a client, sends up the first cat he can lay hands on, which is in fact quite inappropriate to the wife's needs. This would make the reversal an ironic one at the wife's expense, emphasising the social and cultural abyss that separates her from the padrone, and revealing her quasi-erotic response to his professional attentiveness as a delusion. (Lodge, 1981：24)

宿の主人がメイドに届けさせた猫がアメリカ人女性が窓から見た猫と同一である，そう Baker が見なすことは，Baker がこのアメリカ人女性のことを “the poor girl” と言い，猫の消失を “very close to tragic” と言って，この女性に同情的であることと辻褄が合っていると言うのである。Lodge のこの発言は理解しにくいが，気の毒な女主人公には幸せな結末を与えたいという気持があるはずだということか。最後に猫を抱いたメイドが登場するのは，アリストテレス風に言えば，物語の逆転である。少なくとも，Baker は “the kindly old inn-keeper” によって猫が届けられたのであり，ホテルの主人の思いやりの気持は夫のそれ以上であると判断している。結末を happy ending と読んでいることはひとまず間違いない。

Lodge がここで「もし猫が本当に捕えに行った猫であったなら」と条件をつけるのは，そうでない可能性を考えているからであり，それが直後に続くパラグラフで示されているのである。そして，われわれもまたそこで Lodge が示しているような読み方をし，その読み方のほうが適切であり普通であると考えている。確かに Baker の読みは Lodge がここで示した読みと対照的である。けれども，Lodge が決めつけているように，Baker は本当にメイドが届けた猫とアメリカ人女性が窓から見た猫とが同一であると考えているのであろうか。

この短篇が若いアメリカ人夫婦のあいだの感情の齟齬を主題とした話であることは，平均的読者にとって読み取りそこなうことがまずないであろう。異国の行楽地で雨に降り込められて所在ない。夫は読書ばかりで相手をしてくれない。どうも，たんにこれだけではないらしい。このときまでに，すでに妻の欲求が抑え込まれるという事態が蓄積されていたらしく思われる。根幹にどのような原因と理由があるかは不明であるが，妻の欲求不満が爆発して口ばしることばに，その片鱗はうかがい知ることができる。Baker が記述しているとおり，妻の口にする欲求は，①髪を伸ばして頭のうしろに結び目を作りたい，②燭台に灯をともして自分の銀の食器で食事をしたい，③春になって晴れてほしい，④新しい衣服を着たい，というものだ。

Hemingway の原文に即せば，まず，髪を長く伸ばすのっていい考えではないかと夫に言ってみると，即座に今のままがいいと言われてしまう。それでも，なお，引き下がることができずに口にするのが①である。そのすぐあとに “I want to have a kitty to sit on my lap and purr when I stroke her” が来る。そして，②と③を口にし，そのあとまた鏡の前で髪をとかしたいと言って，また “I want a kitty” があって，④が来る。たぶん，妻は夫の好みに合わせて自己の欲求を抑えるよう強いられてきたが，ついに抑えきれなくなって言いつのることになったのであろう。この女性の姿には幼さが残るが，男性のほうもまた妻の気持を忖度する気配がない。

夫に口を閉じてなにか読むものでも取ってくるように言われ，相手にされないまま，しばらく窓の外を眺めている。そのあとで，ついに抑えきれなくなって，Baker の引用していることばがほとばしり出るのである。“Anyway, I want a cat” “I want a cat. I want a cat now. If I can’t have long hair or any fun, I can have a cat.” 髪を長く伸ばすことは夫の好みに合わないために見込みがない。異国の旅先では自宅の食事はかなわない。春はまだ先だ。旅先で衣服も思うにまかせない。せめて猫ならいいでしょ。

この状況について，Baker はこの気の毒な女性が「現実的なるもの」（the actual）対「可能的なるもの」（the possible）のフェース・オフのレフェリーであると言う。Baker のこういう表現は大仰で滑稽であるが，この現実的なるものと可能的なるものとのあいだに猫（the cat）が位置すると続くのである。そして，その猫（It）が思いやりの深いホテルの主人によって届けられる。

この文脈で，代名詞の “It” はその直前に定冠詞付きで現われる “the cat” を受け，その “the cat”

は妻が “Anyway, I want a cat . . . ” と言ったときの不定冠詞付きの “a cat” を受けている。Baker の理解では，アメリカ人女性が窓から見て捕えに行ったときに姿を消していたあの猫でなければならないとは考えていない。アメリカ人女性が「とにかく猫がほしいのよ」（Anyway, I want a cat）と言ったときに考えられているのは，もはや雨のなかに見たあの特定の猫ではなく，すでに猫という種である。だから，Baker が定冠詞付きで用いた “the cat” はアメリカ人女性が用いた種としての “a cat” を受けたと言ってもいいし，あるいは，Baker 自身が「現実的なるもの」対「可能的なるもの」と抽象的な表現を用いたから，両者のあいだに存在するとした猫もまたそれらの抽象的表現に見合った総称としての “the cat” となったと言ってもいい。

猫をほしがる女性のところに猫が届けられたのだから，まずはめでたい。これが Baker の読みである。われわれと同じように，届けられた猫は雨のなかの猫と異なると読んでいるはずであるが，Baker にとって猫がこの物語のなかで持つ意味はもちろん，猫の大小や毛色の差異が有意味であることに関心が及ばないのである。「猫がなぜか（somehow）妻の頭のなかでは快適なブルジョワ家庭性を表わしている」と言ったりしているところを見れば，それがわかる。ついでながら，夫が妻に口を閉じてなにか読むものでも取ってくるように「穏やかに」（mildly）言ったと Baker は記しているが，これは Baker の勝手な読み込みである。さらに，この女性の欲求を「非合理な願望」（irrational yearning）と言ったり，引用冒頭で「“Cat in the Rain” は男性がちょっとしか接触を持たない女性の世界の一隅を提示する」と言ったりして，読みがよくあるステレオタイプの偏見に汚染されている。

そういう次第であるから，たぶん，Baker はメイドが届けた猫と雨のなかにいた猫とが同一であると考えていたわけではないであろう。そうではなく，猫は違っても，猫には違いないから，そこにホテルの主人の好意を認めているのであろうと思われる。これは大人の反応ではあるが，幼稚なところを残すアメリカ人女性が示すと推測される反応はこれとは異なるであろう。Lodge は Baker が同一の猫と読んでいると決めてかかっているが，それは根拠がない。

Lodge が Baker の読みと考えるものに対置した対照的な読みは Lodge 自身の読みであるとともに，さらに先へ行って Lodge が引用する John V. Hagopian（1962，1964，1975）の読みでもある。

> The girl’s symbolic wish is grotesquely fulfilled in painfully realistic terms. It is George, and not the padrone, by whom the wife wants to be fulfilled, but the padrone has sent up the maid with a big tortoise-shell cat, a huge creature that swings down against the maid’s body. It is not clear whether this is exactly the same cat that the wife had seen from the window — probably not ; in any case, it will most certainly not do. The girl is willing to settle for a child-surrogate, but the big tortoise-shell cat obviously cannot serve that purpose.（Hagopian，1975：232）

Hagopian は「メイドの届けた猫が妻の窓から見た猫と正確に同じかどうかは明らかでない――たぶん，同じではないであろう」と言った上で，「いずれにしても，確かにこの猫では用をなさないであろう」と推測を加えている。ここまでのところは Lodge が Baker の読みと考えたものに対置してみせた読みと同じである。

最後にメイドが届けた “a big tortoise-shell cat” について，一方に Lodge が Baker の読みと考えるものがあり，他方に Hagopian および Lodge の読みがあった。これによって，猫と猫の引き起こした物語の結末が曖昧になっていると，Lodge は言いたいのであった。しかし，Lodge が Baker に帰した猫の同一性が根拠のないものであるとすれば，猫の実体に関する曖昧は消えてなくなる。そ

れでも Baker のような結末の読みがあるとすれば，確かにこの物語の結末は二様に読めるから曖昧であることになるかもしれない。しかし，Baker の読みはアメリカ人夫婦の関係，猫の持つ意味などに理解が届いていず，読みとして拙劣である。だから，結局，Lodge が「結末の曖昧」と繰り返し言うにもかかわらず，ここには適正な読みと拙劣な読みがあるだけで，曖昧は存在しているわけではない。

Lodge の行なった見事とも言える視線の分析に触れなければならない。Lodge はこの作品に浸透している視線のあり方を辿り，それが最終場面で決定的な役を果たしていることを示す。

> We can now fully understand why the ending of the story is so ambiguous : it is primarily because the narration adopts the husband’s perspective at this crucial point. Since he did not rise from the bed to look out of the window at the cat sheltering from the rain, he has no way of knowing whether the cat brought by the maid is the same one — hence the non-committal indefinite article, ‘a big tortoise-shell cat’. If, however, the wife’s perspective had been adopted at this point and the text had read,
>
> ‘Avanti,’ the wife said. She turned round from the window.
> In the doorway stood the maid. She held a big tortoise-shell cat . . .
>
> then it would be clear that this was not the cat the wife had wanted to bring in from the rain (in which case the definite article would be used). It is significant that in the title of the story, there is no article before ‘Cat’, thus giving no support to either interpretation of the ending.
>
> (Lodge，1981：29)

大きな三毛猫を抱えたメイドの姿は夫の視線に捉えられたものであると言うのだ。夫は雨のなかにいた猫を見ていないから，届けられた猫が雨のなかにいた猫であるかどうか判別のしようがない。したがって，夫の視線を利用した結末の叙述は猫の実体について不確定のままになっている。もしここで妻の視線を利用していれば，同じ猫か違う猫かは立ち所に叙述の文章のなかに明確になってしまう（同じ猫なら定冠詞付きで，違う猫なら不定冠詞付きで現われるから）。そう言うのである。

しかし，そうであるからと言って，最後に届けられた猫が雨のなかにいた猫と同じであるかどうか不確定であるということになるか。それは夫にとって不確定であるというだけで，物語の作者および読者および作中の妻にとって不確定なわけではない。猫の実体は現状で不確定ではないが，もし不確定にすることが真に Hemingway の意志であるなら，雨のなかにいた猫と届けられた猫をもっと似せなくてはならない。ところが，両者が似てくれば，今度は同じ猫と受けとられる恐れが生ずる。それは作者の意図ではないのだ。猫は違っていなければならない。その意味では，現実の作品のとおりが必要にして十分なのである。

ところで，叙述が夫の視線を使うことになったのは，妻の立っていた窓辺よりも，夫の読書をしていたベッドの位置がドアに近く，顔がドアの方向を向いていたことによるであろう。ここは窓から外を眺めていた妻が振り返って応答してもかまわないところであるが，そうしないのは，妻の心が沈んでいて，ノックに対する反応において夫に一瞬先を越されたというふうに読むべきところなのだ。かりに妻が振り返って応答したとすれば，妻の視線に捉えられた猫は同じように不定冠詞付きで示され，異なる猫であることが文法的にも明確になるであろうが，夫の視線に捉えられた猫で

あっても，夫に判別がつかないだけで，読者には違う猫であることが歴然としている。だから，ここにはLodgeの言いなすような猫の実体に関する曖昧はないと言える。

夫あるいは妻のどちらの視線を使っても，ここで物語を打ち切るなら，妻の反応が隠蔽されることになる。すなわち，そこにはまさに作者が言わないことによって読者に推測する余地をわざわざ残していることになる。妻の反応は，猫が来たのだからともかく喜ぶから，猫が違うからさらに落胆を大きくするにいたるまで，理屈上，多種多様でありうるけれども，先行するこのアメリカ人女性の性格造型の延長線上にその反応を推測するとすれば，おのずから一定の反応に絞られるであろう。だからこそ，作者Hemingwayはそこの判断を安心して読者に委ねているのである。

実を言うと，Lodge自身「結末の曖昧」ということばを繰り返しながら，猫の実体の不確定を信じてはいない。この点で大沼（1987）はLodgeを読み間違えている[1]。そのことは結末の視線の論証の直後にこのようなことを言っていることからもわかる。視線の論証の限度を承知しているのである。

> Carlos Baker's assumption that the tortoise-shell cat and the cat in the rain are one and the same is therefore unwarranted. Hagopian's reading of the ending as ironic is preferable but his assumption that the wife's desire for the cat is caused by childlessness is also unwarranted.
>
> （Lodge，1981：29-30）

もし視線の論証を信じ，猫の実体が不確定であると言いたいなら，2匹の猫が同じ猫であるとするのが根拠のないように，2匹の猫が違う猫であるとするのも根拠がないことになるであろうから，そのように言わなければならない。しかし，そうは言わないのである。当然のことであるが，結末の夫の視線の論証は猫の実体の不確定性を保証する決定打にはならないということである[2]。

2　妊娠の問題は問題として成り立つか

議論の方向を転換するように，同じように「根拠がない」ということばが差し向けられるのが，アメリカ人女性が妊娠願望を抱いているとするHagopianの読みに対してである。アメリカ人女性が猫を捕まえにいって果たせずに戻ってくるとき，ホテルの主人の事務室の前を通る。そのときに，この女性がちょっと奇妙な感覚に捉えられる。それについて，Hagopianはこう読んでいる。

> Disappointed, she again enters the lobby and again the padrone rises to bow to her, a gesture which makes her feel "very small and tight inside . . . really important . . . of supreme importance," all phrases that might appropriately be used to describe a woman who is pregnant. The conscious thought of pregnancy never enters her mind, but the feelings associated with it sweep through her.（Hagopian，1975：231-232）

このときのアメリカ人女性の覚えた感覚はまさしく妊娠した女性の覚える感覚である。しかし，旅先の夫とその女性には子どもがなく，女性は心の奥底で子どもを欲しているにもかかわらず満たされず，代りに子猫に執着しているのだ。そして，その文脈で，無意識のうちに一瞬の幻覚におそわれたのだと言っているのである。

これに対して，Lodgeはまぜっかえすかのようにこう反論する。

> The cat as a child-surrogate is certainly a possible interpretation in the sense that it is a recognised cultural stereotype, but again Hagopian tries to enlist in its support textual evidence that is, if anything, negative. He comments on the description of the wife's sensations as she passes the hotel-keeper for the second time: ‘ “very small and tight inside . . . really important . . . of supreme importance” all phrases that might appropriately be used to describe a woman who is pregnant’. But not, surely, to describe a woman who merely *wants* to be pregnant. Indeed, if we must have a gynaccological reading of the story it is much more plausible to suppose that the wife's whimsical craving for the cat, and for other things like new clothes and long hair, is the result of her *being* pregnant.（Lodge，1981：30）

Hagopian はこのアメリカ人女性の願望の真の対象は子どもであり，猫はその代替であるとしているが，そのことを主張するために掲げるテクスト上の証拠はまたしても否定的に作用していると言うのだ。作品の当該個所は，アメリカ人女性が追いつめられて覚える幻覚の妊娠にもとづく無意識の体内反応と考えるより，そのものずばり，現実の妊娠にもとづく体内反応と考えるほうが適切ではないかと言うのである。その根拠として，①医学的に見ると，このアメリカ人女性があれこれ欲しがるのは，まさに妊娠した女性が示す徴候である，加えて，この引用の直後に，②テクスト外の証拠として，Hemingway がこの物語を書いていたときが，ちょうど妻 Hadley の妊娠したときと重なる，というようなことを掲げる。

Hagopian のあげる証拠について，Lodge が「またしても」（again）否定的に作用すると言っているのは，先立って Hagopian が奇妙なことを言っていたからであった。アメリカ人女性がホテルの玄関から出ようとしたとき，雨のなかをゴム雨合羽を着た男が広場を横切るのが目にとまった。このゴム雨合羽の男について，

> The rubber cape is protection from rain, and rain is a fundamental necessity for fertility, and fertility is precisely what is lacking in the American wife's marriage. An even more precise interpretation is possible but perhaps not necessary here.（Hagopian，1975：231）

と言っていた。ここには 3 つの文が and で等置されただけで，Hagopian は論文の読者に推論するように委ねている。

①ゴム雨合羽は雨を遮るもの
②雨は豊穣に欠くべからざるもの
③豊穣はこのアメリカ人女性の結婚生活に欠けているもの

尻取りのようである。わざわざ明言を避けていることを明言するのは趣味がわるいが，アメリカ人女性の結婚生活が豊穣と縁遠いのは豊穣に不可欠の雨を遮っているからだということになる。ゴム雨合羽の男に避妊のゴム製品を装着した男性器を連想させようとしていることは間違いない。

ゴム雨合羽の男は物語中の異和のもとであるから，なんとか合理化して片づけたいとは思うであろう。そのための根拠に「雨＝豊穣の源」という連合を持ち出すのが不適切だと，Lodge は指摘するのである。雨は豊穣の源にもなるが，不快の源にもなる（災害の源にもなる）。そもそも，人間生活の豊穣と穀物栽培の豊穣を一緒にしようというのが無理だ。晴れた日にはキャンバスを携えてやって来る画家が雨の降るこの日にはやって来ないことに関連して，“The rain, ironically, inhibits

creativity”（Hagopian：230）と注釈するのも，Hagopian としては一貫しているけれども，笑止と言うしかない。Hagopian は神話・原型批評に毒されている。W. K. Wimsat の言う “intentional fallacy” にならえば，これは archetypal fallacy とでも呼ぶことになろうか。

ついでながら，物語や小説をどう読むのも読者の自由であるが，それでも，基本的には，叙述の流れに沿ってまず水平的に読まれなければならない。第一次の読みは metonymic でなければならない。水平的な読みに直交する垂直的な読み（それが metaphoric な読み，あるいは symbolic な読み）を途中で混在させるのは注意を要する。symbolic な読みはそれ自体がなにかを根拠にしてなされるものであって，なにか別のものの根拠にならないはずのものである。

Lodge は，だから，雨は雨なのであって，ゴム雨合羽の男を横切らせたのは，ひるがえってこのアメリカ人女性が傘も持たずに飛び出してきてしまった不用意を際立たせ，メイドに傘を持ってあとを追わせるホテルの主人の好意の出番を用意しているのだと読む（Lodge：25）。作家らしい巧妙な読みと言える[3]。

それはそれとして，しかし，Hagopian の幻覚の妊娠に対置して Lodge が提出した現実の妊娠の根拠としてあげる 2 項目は，いずれも根拠がない。①妊娠中の女性は気紛れにいろいろなものを求めたりわめき散らしたりするものであるというのは，たぶん，医学的な根拠がないであろう。②作品執筆時に作家の妻が妊娠していたというのがテクスト外の証拠になると本気で信ずる人がいるだろうか。その上，Lodge の現実の妊娠説はその場かぎりで，前後の文脈から浮き上がってしまっている。すなわち，①猫が見つからず落胆して戻ってくる女性を描写するところで，これまで the American wife という呼称を用いていたのが，突如 the American girl という呼称に変わっている事態に合理的な説明が与えられない。②子猫が欲しいと言うのも，妊娠中の女性が示す気紛れの 1 例で，食器，衣服，髪型，季節などのなかのたまたま 1 つであるにすぎなくなってしまって，この物語のなかで猫に課せられた特別の意味が見失われてしまう。その点で，Hagopian の幻覚の妊娠説のほうが数段すぐれていて，教養のある読者の好みに合う。そうなると，ここでもまた，Lodge の言う曖昧があるのではなく，より優れた読みと劣った読み（あるいは拒絶される読み）とがあることになるだけである。

Lodge は自身の分析と論証の結果について，つぎのように言う。

> The implied notion of *vraisemblance* on which Hemingway’s story depends, the assumed relationship between the text and reality, is essentially continuous with that of classic bourgeois realism, yet in the experience of readers it has proved ambiguous, polyvalent and resistant to interpretative closure.（Lodge，1981；23）

Hemingway, “Cat in the Rain” は古典的なブルジョワ・リアリズムと地続きであるが，読者の体験では「曖昧な」（ambiguous），「多値的な」（polyvalent）作品で，「解釈の閉鎖に抵抗している」（resistant to interpretative closure）ということが判明したと言うのだが，これはほとんど Lodge の錯覚である。この曖昧を過度に重視し追及する態度もまたある種の文学批評に毒されているであろう。この態度は ambiguous fallacy とでも呼ぶべきである。

Lodge とともに，われわれも Hagopian の妊娠幻覚説に振り回わされてしまったかもしれない。Hemingway の思わせぶりの叙述にもよる。主人公のアメリカ人女性は猫が手に入らなくて落胆し

て戻る。そのとき，その女性を指す名辞が wife でなく girl に変わってしまった。事務室の前を戻るとき，また主人がおじぎをする。そのときの感覚である。Hemingway の原文はこうである。

> As the American girl passed the office, the padrone bowed from his desk. Something felt very small and tight inside the girl. The padrone made her feel very small and at the same time really important. She had a momentary feeling of being of supreme importance. She went on up the stairs.

このアメリカ人女性が一刻も早く自国に帰って，自分の家で安定した家庭生活を営みたいと願っていること，安定した家庭生活において子どもを産んで一般的な意味で女性らしい役割を果たしたいと思っていること，このことは確実であるが，上の引用部分は現実にせよ幻覚にせよ本当に妊娠に関係しているであろうか。

これに対し，往路，事務室の前を通ったときはこうであった。

> He stood behind his desk in the far end of the dim room. The wife liked him. She liked the deadly serious way he received any complaints. She liked his dignity. She liked the way he wanted to serve her. She liked the way he felt about being a hotel-keeper. She liked his old, heavy face and big hands.

非常に対照的である。宿の主人とことばを交わしたあと，好きだ好きだと思いつつ（like が 6 回使われ，最初の 1 回が彼その人を，2 回目以後 6 回目までが，彼の行為と特徴の具体的な側面個々を対象としている），通り過ぎる。

帰路，事務室の前を通ると，またデスクについている主人が頭を下げる。とたんに，往路の場合に見合った反応が女主人公の内面に引き起こされる。とくに子猫を捕えそこなって落胆して戻るときである。心の振幅が大きくなっていると考えて間違いない。このとき，このアメリカ人女性が妊娠中であって，たまたま妊娠の徴候を覚えるということがあるだろうか，あるいは，妊娠の幻覚に襲われるということがあるだろうか。当人にも自覚されていない事柄なのだから，他者にわかるわけがないなどと言うわけにはいかない。偶然のことだから，なかったとするのはむずかしいであろう。けれども，よく考えてみると不自然である。ホテルの主人を前にしたときの瞬間的反応であるということが。このアメリカ人女性に子どもがなくて，子どもを欲しているというところまでは同意が得られるが，その先の妊娠に関係づけた読みは誤っている可能性がある。

ホテルの主人を前にしたときの内面の反応は，

①体内でなにかが小さく引き締まる感じがした。

②自分が非常に小さく，そして同時に真に重要であると感じさせられた（させたのは宿の主人）

③瞬間的に自分がこの上なく重要であるという感じを抱いた。

これらはホテルの主人を前にした，ほとんど瞬間的な感覚であった。つぎの瞬間には，このアメリカ人女性はそのまま階段を昇っているのである。

岡田（1994）はこの作品をアメリカ人女性とホテルの主人とのあいだの真情交流が主題であると読んでいる。その点で Baker の読みと似ていなくもなく，楽天的にすぎる。そして，細部においては，たとえば，この海辺のホテルにはアメリカ人夫妻しか泊まり客がいなかったとか，ゴム雨合羽の男はホテルの主人が猫を捕まえにつかわしたホテルの従業員だろうとか，ゴム雨合羽には雨を

はじく力があることから推して不幸をはねのけるという象徴的意味があるものと推察されるとか，ジョークではないかと思われるほど愉快な誤読が目立つけれども，いま話題にしている個所について，こういう理解をしている。

> ……彼女が＜ホテルの主人＞の前を通る時に，彼女自身がとてもちっぽけな存在であると同時に，この上なく偉大な存在に感じられたのは，彼女にとって，＜ホテルの主人＞は，寛容と慈悲の化身とも言うべき，偉大な神のような存在に思われたからなのである。
>
> （岡田，1994：170）

岡田がこう言うとき，パスカル『パンセ』の 397，443，人間は自分が惨めであることを知ることにおいて偉大である，人間は光を持つに応じて，自己のうちにより多くの偉大とより多くの卑小を発見する，といった省察を思い起こしている（岡田，1994：170）。

パスカルのこの省察は人間の一般性に関するものであるから，Hemingway がパスカルを参考にしてこの作品を書いたと主張するのでないかぎり，同じ考え方を共有しているという意味で，このように述べることは有効である。

すなわち，このアメリカ人女性は，往きは the American wife（事実そのとおりである）としてホテルの主人に好感を持ちながらその前を通り過ぎ，子猫を捕まえそこなってがっかりして戻るときには，あたかも少女期に退行したような感覚になって（それが the American girl という名辞の指定するところである），寛容と慈悲の化身のごとき，人生経験の豊かな，頼り甲斐のある，大好きな人物を前にして，一瞬胸がキュンとなった，卑小な存在ではあっても大事な存在なのだと慰撫される感覚を覚えた。ホテルの主人は，子猫が手に入らなくて突如落胆したこの少女の甘えたい心を受けとめて支えてくれる存在だったということになる[4]。

注

1　大沼（1987）は，言語学の知見をもって文学テクストに対したとき，どのような貢献ができるかを具体的に示すという意図で書かれたものである。問題を猫の同定に絞って，①kitty という語の語用，②物語における人物の視点，この 2 点から検証し，最終的に，雨のなかにいた猫とメイドによって届けられた猫とは同じとも違うとも決められない，不確定であるという結論に達する。そして，同じく Lodge が不確定の判断をしているとして，Lodge を激賞している。そうでないことは，拙稿（1996）で論じた。大沼が読みの見本として示したなかで，2 人の言語学者の読み方を不適当として退けているが，そちらこそが普通の読者の読みを代表していて，逆に適切である。

2　今村（1990）は，Hemingway の芸術において猫の果たす重大な意味をえぐり出して見せた創見に満ちた論考であるが，この小篇の結末について以下のように評価している。

> 作者はメイドが部屋にやって来たときに，そのメイドと猫を眺める視点的人物を，夫のジョージに任せている。（妻は窓辺で外を眺めていた。）夫は外のテーブルの下の猫を見ておらず，メイドの猫と妻の見た猫の違いを区別することはできない。いわば無知の眼差しで差し出された猫を眺めているに過ぎない。眼の前の猫に対してとるべき対応も反応もないのは，その無知による。もちろん，ヘミングウェイは夫とメイドのやりとりから妻を部外者に置くことで，妻の反応を描くことをしない。妻の反応を描けば，ヘミングウェイがめざす――曖昧性をとどめることにより，意味に重層性を与える手法による効果――《アンビギュイティ》が失われ，この短編の面白さは損なわれてしまう。すなわち，題名の “Cat in the Rain” の “Cat” という，不定冠詞も定冠詞も付かない曖昧さが意味を失ってしまう。

もし，妻がこの猫を見て，同一の猫と判断すれば，この猫は “the cat” と表現せざるをえないし，異なる猫なら “a cat” となり，いずれにしても《アンビギュイティ》の効果は失われる。（今村，1990：117－118）

物語の標題の cat が無冠詞であることも含めて，Lodge を完全になぞっているが，「曖昧性」をとどめることにより，意味に重層性を与える手法による効果―《アンビギュイティ》というのは不適切である。ここは「黙することによる効果」であり，Hemingway 自身もそう考えているはずである。

3　ゴム雨合羽の男（a man in a rubber cape）については，雨の日の偶然目にとまった景物の１つであったというだけで，詮索することが適切かどうか疑う人もあるであろう。しかし，この存在が読者の心に多少の小波あるいは痼りのようなものをひき起こしはするであろう。ちょうど，雨のなかにいたのが犬でなくて猫であったというのと同じ意味で，傘をさした女性でなくて雨合羽を着た男性であったことがたんなる偶然以上の意味を持っているかもしれないことに思いを致すのは見当違いというわけではない。

だからこそ，Hagopian は想像をたくましくし，Lodge はそれに待ったをかけて別の方向に引っぱってみせた。Hemingway の研究者なら，起源探索的に Joyce，*Ulysses* の謎めいたマッキントッシュの男を思い起こすであろうし，小説家なら，Lodge のように，技法考量的に創作技法の冴えを察知するであろうし，批評家なら，今村（1990）のように，Joyce の影響を辿ってみせた上で，無人の広場を横切って向かいのカフェに姿を消す人物を描くことで，店先で外を眺めていたウェイターが引っ込み，猫が消え，そして広場には誰もいなくなったことの効果にも注意を怠らず，また，Hagopian のように，雨と豊穣の観念連合を棚上げすれば，突飛ではあるがかすかにそれらしくもあるもの（それが象徴というものだ）を感知したりすることであろう。さらに，素直な素人読者なら，まず第１にそれがアメリカ人女性の目に捉えられた唯一の人影であったことから，ひょっとして怪しの者で子猫をさらって行きはしなかったかと胸騒ぎを起こす原因となったろうと思ったりするところであろう。合羽，コート，マント，ガウン，蓑などの含意するところは，正体を隠すこと，日常性を隠すことであり，それは，ある場合には権威の，またある場合には怪しの者の商標であるからだ。

4　この点については，妊娠ならびに妊娠幻覚は関係しないとする Warren Bennett（1990）が妥当で，われわれの読み方と歩調があっている。さらに主人公の girl と表象された女性がホテルの主人の前を通ったときに覚えた tight inside―important―of momentary supreme importance の３段階の感覚が，Hemingway が勉強していた Havelock　Ellis の性心理学の影響を受けて，女性の性的な desire―intercourse―orgasm の３段階に芸術的な加工を施したものであると指摘している。興味深いけれども，判断しかねる。さらに加えて，ホテルの主人をめぐるアメリカ人女性とイタリア人メイドとの心理的確執を読んだあと，最後，メイドが大きな三毛猫をしっかりと抱きかかえ，猫がだらっとぶら下がっていた姿は，猫が主人の所有物であるとともに，主人その人とも言える存在になっていて，メイドは猫を手離したくないのだ，メイドの身体からだらっとぶら下がっているさまは暗に性的なイメージになっている，とまで言われると，またしても即座には付いて行けない。猫をしっかり抱えたり，猫が身体からぶら下がったりするのは，猫が大きいことから来る帰結であるとすることですますわけには行かないか。

References

Baker, Carlos. *Hemingway : The Writer as Artist*. Princeton, N. J. : Princeton University Press 1952：135-136.

Bennett, Warren. “The Poor Kitty and the Padrone and the Tortoise-shell Cat in ‘The Cat in the Rain.’” *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Ed. Jackson J. Benson. Durham and London : Duke University Press, 1990.

Brook-Rose, Christine. “The Squirm of the True.” *Poetics and Theory of Literature* I（1976）：265-94 and 513-46, and II（1977）：517-61. Reprinted in her *A Rhetoric of the Unreal*. Cambridge : Cambridge University Press, 1981：128-229.

Hagopian, John V. “Symmetry in ‘Cat in the Rain.’” *College English* 24（Dec. 1962）：220-22. Reprinted in *The Dimension of the Short Story*. Eds. James E. Miller and Bernice Slote. New York : Dodd, Mead, 1964：

531-33; *The Short Stories of Ernest Hemingway : Critical Essays*. Ed. Jackson J. Benson. Durham ; Duke University Press, 1975: 230-32.

Lodge, David. "Analysis and Interpretation of the Realist Text : A Pluralistic Approach to Ernest Hemingway's 'Cat in the Rain.'" *Poetics Today* I (1980): 5-19. Reprinted in his *Working with Structuralism : Essays and Reviews on Nineteenth- and Twentieth-Century Literature*. London : Routledge and Kegan Paul, 1981: 17-32.

Smith, Paul. Ed. *A Reader's Guide to the Shot Stories of Ernest Hemingway*. Boston, Mass. : G. K. Hall & Co., 1989.

今村楯夫『ヘミングウェイと猫と女たち』東京：新潮社（選書），1990.

大沼雅彦「「雨のなかのネコ」の文法の一面」『日本語学』6（1987）：83-92.

岡田春馬『ヘミングウェイの短篇小説』東京：近代文芸社，1994.

栗原　裕「"Cat in the Rain" と解釈の問題」『共立女子大学文芸学部紀要』39（1993）：横組み 1-27.

――――「Lodge の猫」『大妻レヴュー』29（1996）：23-35.